

こうじ 工事の げんば 現場より

こうじ げんば りんしゅんかく とくべつしゅっちょう
工事現場の臨春閣から特別出張！



企画展特別 ver.

vol.5 繋の間・第三屋

繋の間 板絵十二支図額

繋の間は三溪園において大正時代に作られた箇所ですが、この板絵十二支図額は、臨春閣が移築される前、大阪にあって「八州軒」と呼ばれていた時代の「豊臣秀吉の夫人北の政所室に備へたりし十二支鏤刻の納戸」（『大阪府誌』

大阪府編・M36）と記述されているものに相当

すると考えられています（「豊臣秀吉の夫人～」のくだりの信ぴょう性はさておき、十二支が彫り刻まれた板というのは類例がないため該当すると考えられる）。建物としては新しい（といっても100年以上）ですが、そこに据え付けられた本図は八州軒時代からの由緒を第一屋・第二屋・第三屋同様持っているのです。

さて、十二支の順序に注目！！ 絵の並びから、かつては向かい合わせで並べられていたのではないかと、いう説も。ただ、対になる組み合わせが十二支の始めの「子」からではうまくいかない。単純には考えられそうにない、ふかーい謎です。（イメージ図参照）

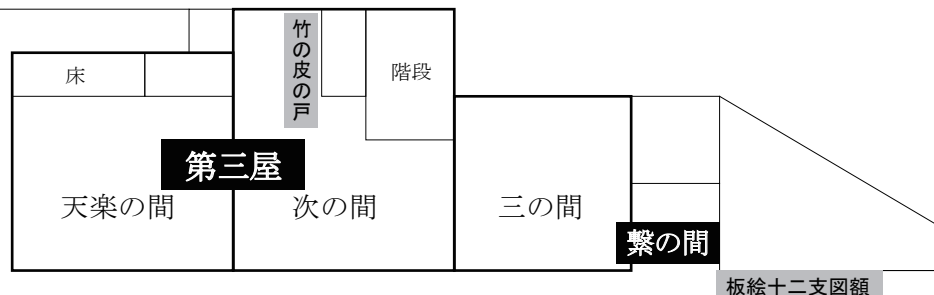
今回複製を作成する案が検討されたため、描かれた絵について詳細な調査が行われました。現在では技術の進歩により、褪色・劣化してしまった材料でも素材を調べる事が出来るため、どのような絵の具を使って描かれたかが分かります。また特殊光撮影により、目に見えない線を見出すことが可能となります。これらの技術により、色鮮やかな色彩の衣をまとった、表情豊かな動物たちが描かれていたことが判明しました。

職人さんのヒトコト

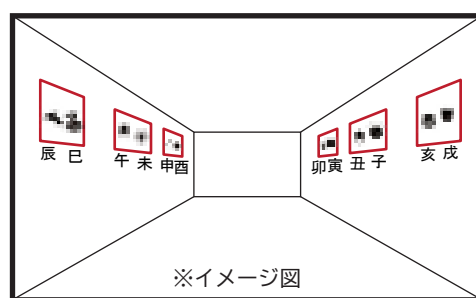
長い年月を経た板絵は風化が激しい箇所もあり、難しい調査となりました。十二支それぞれに違う衣装を着せた構図や紋様、細やかで軽やかながらも生き生きとした墨線など当時の絵師の遊び心と卓越した技が感じられ、楽しく作業することができました。



小西美術工藝社 彩色工
小池靖夫さん

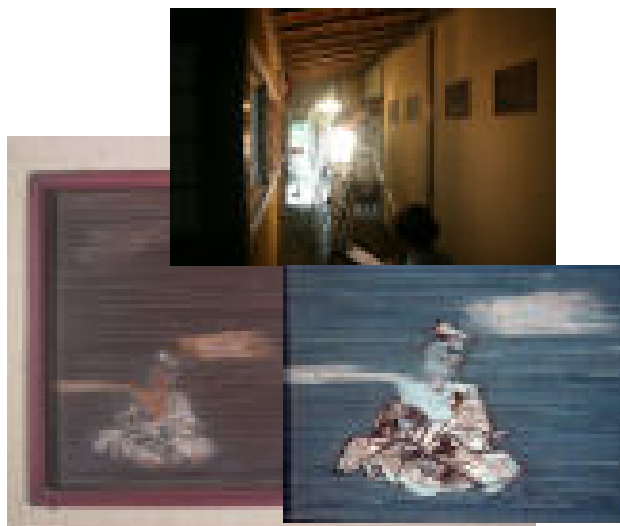


板絵十二支図額



※イメージ図

2011 年に行われた特殊光調査の様子



左が通常撮影、右が特殊光撮影。特殊光撮影では肉眼では分からない表情や着物の模様などがはっきりと見て取れる。

第三屋 竹の皮の戸

薄く剥いだ竹の皮を並べたこの扉、現代の技術では同じものを作るのは難しいとのこと。一番左の扉の左側部分、色の違う箇所は後世の補修（ひしやぎ竹）であることが明らかで、残念ながら技法的に当初の姿を補うには至っていません。今回の修理も汚れ落としと浮いて剥がれた竹の皮の接着のみ、出来る限り残されている古の技と素材を活かしていきました。

この建具の引き戸金具も必見。花頭のような形の面白さもさることながら、刻まれた模様も見事です。